

第 1 回世田谷区総合教育会議

日：令和 4 年 7 月 30 日（土）

場所：世田谷区立教育総合センター

午後2時開会

○司会 定刻になりましたので、令和4年度第1回世田谷区総合教育会議を開催いたします。

まずは進行に当たりまして、新型コロナウイルス感染症対策につきましてお願いです。会場にお越しいただいている皆様におかれましては、開演中のマスクの着用等、感染症対策への御理解、御協力をお願いいたします。

私は、本日、司会進行をさせていただきます、政策経営部政策企画課長の秋山といたします。どうぞよろしくお願いいたします。

それではまず、開催に先立ちまして、区長の保坂より御挨拶申し上げます。区長、よろしくお願いいたします。

○保坂区長 皆様、こんにちは。世田谷区長の保坂展人です。

今日は夏の暑い盛りでございますけれども、総合教育会議は世田谷区と世田谷区の教育にとって大変重要な会議でございます。世田谷区の小中学校の教育が今後どの方向で進んでいくべきなのかという大きな方向性を議論する場でございます。毎回、私が呼びかける形で、教育委員の皆さんと共に、公開の場で、平成27年から始めてまいりました。こういった中で、例えば今日も話題になります学力観、あるいは、学びそのものの質の転換、いわゆる勉強する、学ぶということが、新しい時代、変化する環境に対して、それをしっかり捉えて、子どもたちが生きる未来に向けて、かけ橋になっていけるような教育内容、そして、障害のある子どももインクルーシブな、共に学ぶという環境をどう実現するかなど、様々議論を重ねてまいりました。

現在は、オミクロン株、B A. 5の蔓延によって大変多くの感染が出ている状況ですが、感染が収束をしていく後で、学びは変化していかなければならないし、どのような変化があり得るだろうかということテーマにしたいと思います。今日のテーマは「コロナ後を見据えた学びの変化について」であります。

本日の会議では、世田谷区立下北沢小学校の校長先生、同時に、全国連合小学校長会の会長でもあります大字弘一郎先生に学校現場からの御報告をまずしていただいた上で、東京大学名誉教授で、せたがや文化財団の理事長をお務めいただいている、元文化庁長官を務められました青柳正規理事長のお二人から基調講演をいただきます。このお話の内容を踏まえて、子どもたちのための教育がどのようにあるべきなのかという議論をしっかり組み立ててまいりたいと思います。

限られた時間ではありますが、実り多い会議となりますよう、積極的な議論を交わしたいと思います。皆様、どうぞよろしく願いいたします。

○司会 区長、ありがとうございました。

さて、本日の会議ですが、会場内での傍聴とオンライン視聴の両方で御参加いただいております。

総合教育会議は、法律により、地方公共団体の長及び教育委員会で構成されております。

ここで、本日の会議に参加されています世田谷区教育委員会の委員の皆様を御紹介させていただきます。一部の委員はオンラインで御参加いただいております。

渡部教育長です。

澁澤委員です。

亀田委員です。

中村委員です。

鈴木委員です。

委員の皆様、本日はどうぞよろしく願いいたします。

それでは続きまして、本日の会議の流れについて御説明させていただきます。第1部といたしまして、基調講演を40分程度、その後、休憩を挟みまして、第2部といたしまして、御講演いただいた内容を踏まえ、区長と教育委員会の委員の皆様で意見交換を行います。そして、最後でございますが、本日の議題に追加がございます。第2部が終了しました後、世田谷区教育大綱の改定に関する協議を行わせていただきます。これにより、本日は当初の予定より20分程度長い時間となります。当日の御案内となり、大変恐縮でございますが、何とぞ御了承いただきますようお願いいたします。

また、傍聴、御視聴いただいております。皆様からいただいた御質問によりまして、第2部の意見交換をさらに充実したものにしてまいりたいと思っております。そこで、区長、教育委員会の皆様、さらに、本日御講演いただきます青柳理事長より回答するコーナーを設けてございます。本日の会議の議論をより深めるため、会場にお越しの方は、事前にお配りをいたしました質問票に、オンラインで御参加の方につきましては、ZoomのQ&A機能にて質問をお寄せいただければと思います。御質問は第1部の基調講演終了後に締め切らせていただきます。ぜひとも御質問をお寄せくださいますようお願いいたします。

それでは、第1部の基調講演に移りたいと思います。

第1部では、お二人の方よりお話をいただきます。まず、お一人目は大字弘一郎先生に

よるお話です。大字弘一郎先生は、世田谷区立下北沢小学校の校長であり、全国連合小学校校長会の会長でもあります。こちらを通しまして、現場で豊かな経験をお持ちです。本日は「学校現場における子どもの変化」についてお話しいたします。

それでは、大字先生、よろしくお願ひいたします。

○大字校長 皆さん、こんにちは。今、御紹介をいただきました、世田谷区立下北沢小学校校長で、全国連合小学校校長会の会長を務めております大字弘一郎と申します。今日は「学校現場における子どもの変化」というお題で、10分というお時間をいただいていますので、早速本題に入って、大急ぎで内容に進みたいと思います。

では、画面を共有します。

こちらの写真は、去年、子どもたちと2か月遅れで日光の林間学校に行ったときの華厳の滝で撮った集合写真です。皆さんが子どもの頃に撮った写真と違和感を感じませんか。何か違うなという感じがしないでしょうか。

これは子どもたちの登校の風景です。去年の夏の頃です。私は毎朝必ず校門に立って、子どもたちを挨拶しながら迎え入れています。このコロナの状況になって、子どもたちもマスクで登校するようになりました。私は今まで以上に子どもの目をじっと見詰めて、ジェスチャーをつけて挨拶します。一人一人に手を振ったりします。これが今年になると、かなり暑くなりましたので、6月の下旬は校門でマスクを取って、マスクを校長が振り回して、「みんな、暑いから、登校のときはマスクを取ってきてね」と言いますが、ある高学年の子は、「校長先生、素顔を見せられません」と真顔で言いました。うちの学校にもこういうマスクあるあるがあるんだなど。マスクについては非常に危惧をしています。

これは授業の様子です。1年生です。机が離れています。昔の小学校は机がくっついていたかと思います。隣の子とぱっとお話ができる。今は物理的にも離れていますし、マスクもしています。こういうところもかなり学校の様子は変わってきています。特にコロナが始まって、マスクの着用が子どもの心身に与える影響は一体どういうことなのかというのを、私ども教育に関わる者のみならず、社会全体で考えなくてはいけないなと思っています。

次は、数字から見える学校現場における子どもの変化ということで、データを基にお話しさせていただきます。

6.0%減少。何だと思いませんか。これをゆっくりやっていると時間がなくなりますので、すぐ答えに行きますが、昨年度の全国学力・学習状況調査で、学校へ行くのは楽しいと思

いますかという問いに、そう思うと答えた6年生の割合が6.0%減少しています。100万人単位の調査ですので、6万人ぐらいの子どもが減っているんです。私たちは、コロナ対策という中で、様々な感染予防やいろんな教育活動の工夫はしてきたんですが、本当に子どもたちの心に寄り添った教育内容になっていたかどうかということは、立ち止まって振り返らなくてはいけないなと思っています。7月28日に発表された令和4年度の調査では、この数字がちょっと上がっています。やっぱり学校行事とかが始まったのは大きいなと思います。

5.7%減少。減少ばかりなんですが、将来の夢や目標を持っていますかという問いに、持っていますと答えた6年生が令和元年度の調査に比べて5.7%下がっているということです。

次です。1時間以上、75.9%、4時間以上、15.4%。何となくお分かりじゃないでしょうか。1日当たりのテレビゲームをしている時間です。4時間以上が15.4%というのは、私の感覚からすると、すごく多いなと思います。私は自分のスマホのスクリーンタイムがたまに1日4分と出て、ほとんど使わないんだなと思います。この数字は令和4年度の全国学力・学習状況調査では、さらに増えています。非常に気をつけなければいけないです。1人1台端末をどう使わせるかということもかなり真剣に考えないといけないかなと思います。

次です。これは衝撃的な数字です。1.0%。小学生の不登校の出現率です。出現率というのは、児童100人に対して、何人、不登校の子どもがいるかという数です。1.0%というのは、100人に1人ということです。平成27年度の2.5倍とわざわざ平成27年度という中途半端なものを出したのは、私が山野小学校の校長になったときで、そのときから比べても2.5倍です。ここ3年間、ずっと上がっています。さらに、低学年の不登校の出現率がずっと増えています。平成3年の出現率は0.14%です。それから見ると、不登校の出現率は7倍になっています。小学校の不登校の子は、平成3年は700人に1人ぐらいしかいなかったんです。今は100人に1人です。これは深刻な問題だと思います。

小中男女とも低下。これは体力テストです。上体起こし、反復横跳び、持久走は大幅低下、長座体前屈はおおむね向上、握力、50メートル走、立ち幅跳びは低下傾向です。何でも長座体前屈だけおおむね向上しているかということ、ストレッチ系はオンラインで家でもできるからです。本当に全身を使って体を動かすものは軒並み低下しています。令和3年度は平成20年以降の最低水準になりました。コロナの影響が非常に大きいなと思います。原

因としては、①運動時間の減少、②学習以外のスクリーンタイムの増加、③肥満である児童生徒の増加が考えられるかと思います。

では、私たち教員は何をすればいいのかという話をしたいと思います。ここが本職なので、本当はここから1時間、2時間、3時間ぐらいしゃべりたいところですが、今日はそうはいきませんので、駆け足で行きます。とにかく子どもたちが楽しく学ぶ学校をつくらなくてはけません。子どもが毎日、「今日も学校、楽しかったな」と言っておうちに帰って、夕飯を食べながら、「早く明日にならないかな」と言ってくれる魅力的な学校をつくりたいなと思います。

いろいろ方法はあると思いますけれども、今日は核となるところだけ、かいつまんで2つです。1つは授業です。教師は教育のプロとして、やはり授業で勝負をしなければいけないと思います。授業の中には全てがありますので、とにかく授業を頑張るということが1つです。こんな感じで生き生きといろいろやっています。もう一つは学校行事です。子どもは学校行事で飛躍的に伸びます。この学校行事をいかに大切に充実したものにすることが学校の肝だと私は思っています。授業と行事が2本の柱です。

これは本校の運動会の様子です。コロナが物すごかったときにやっています。

お願いします。子どもたちのこういった生き生きとした姿を生み出すためには、とにかく先生が元気じゃなきゃ駄目です。教育は人なりなので、先生が元気でなければ、いい教育はできません。なので、保護者の方、地域の方、教育関係者の方をお願いをしたいのは、とにかく先生を応援して、先生に感謝の言葉を伝えて、ねぎらいを伝えて、先生が元気になる、元気な先生が元気な学校をつくって、元気な子どもを育てる好循環をつくっていただきたいなと思っています。

私にとってとてもすてきな菓子を最後に紹介します。これは2年生がくれた手紙です。朝、挨拶をしていると、2年生の女の子がとことこっと来て、「校長先生、お手紙を書きました」とくれました。「大字校長先生へ いつも本当にありがとうございます。私は、勉強が苦手なのですが、漢字テストで100点をとれるようになってきました。私は、校長先生が、朝、大きな声であいさつをしてくれるのがとてもうれしいです。私は、校長先生が大好きです！！！！」。この手紙をもらっただけで退職まで頑張れます。やっぱりこういうのが先生たちには大事なんです。びっくりマークが4つありますけれども、決して盛っていませんから。本当に4つくっつけて、子どもがお手紙をくれてます。

ぜひ学校の先生方を元気にしてください。そして、コロナに負けない子どもたちを育て

ていきたいなと思います。

今日はありがとうございました。また今後ともよろしく願いいたします。(拍手)

○司会 大字校長先生、ありがとうございました。お時間がない中で、端的にお話をいただき、本当にありがとうございます。

本来であれば、大字先生にこのまま最後までいていただきたいんですけども、この後、御予定がありまして、本日はこれにて御退席をされます。会場の皆様、再度盛大な拍手でお見送りください。先生、ありがとうございました。(拍手)

それでは引き続きまして、お二人目、青柳正規理事長より御講演をいただきます。青柳理事長と御紹介いたしましたが、先ほどもございましたが、公益財団法人せたがや文化財団理事長でございます。また、東京大学名誉教授でもあります。本日、御講演いただくテーマは「コロナ後を見据えた学びの変化について」でございます。

それでは、青柳理事長、よろしく願いいたします。

○青柳理事長 今日は「コロナ後を見据えた学びの変化について」ということで、うまくお話しできるかどうか分かりませんが、最初に、私は今までどんなことをやってきたのか簡単に御紹介します。

1974年から1976年ぐらいまで、ポンペイで発掘をしておりました。これはその頃の僕なんですけれども、ポンペイで仕事をしていたときに、いろんな国の人たちと知り合うことができ、それが50年以上、今でも続いているということで、私の宝になっております。

まず、ポンペイを3年ほどやって、それから、これが現在の遺跡ですけれども、シチリアのリアルモンテというところでかなり長い間やっていたので、いろいろな人たちと知り合うことができました。シチリアは日本の沖縄のようなところですから、ある隔絶感と古い伝統を守っているところ、一方で、いろんな意味で本土に近づかなくちゃいけないものがあって、文化とは何か、経済とは何かということを非常に知ることができました。

シチリアの次は本土に戻って、タルクィニアという、ローマから120キロぐらい下に行ったところでの発掘を1992年から2005年まで続けました。空から見るとこんなところで、真ん中にある四角いところが発掘区域で、黒くなっているところは、不織布という黒い布を敷いてしまっているのです、ああいう色になっていますが、10年以上かけて発掘しました。面積も5000平方メートル以上あって、そこからはローマ時代の浴場が出ました。この過程で、単に発掘するだけでなく、発掘の費用もかかるので、お金集めのようなこと、それから、向こうの現地の人たちとどううまく付き合っていくのか、許可をどう維持してい

くのかということで、かなり研究とは違う面のいろいろな勉強をさせられました。このような彫刻もここから出てきました。

今現在は、ヴェスヴィオ山という、ナポリ湾に面している、1280メートルの低い山ですが、なかなかきれいな山の姿を持っています。南のほうにポンペイがあって、我々は北のほうを発掘しております。これは小屋があったところですが、除いたところを下に掘って、列柱廊が最初に出てきました。それから、発掘をスムーズに進めるために、前田建設から寄附をもらって、ビル建設のためのクレーンなども現地で造りました。

早い段階、2003年のときに既にこのような彫刻が発掘できたり、これは修復した後ですが、ディオニュソス像が出てきました。そういうところを重機も使いながら、壁画の発掘なども行いました。

白黒モザイクで床を装飾している、お客さんを招いて食事などをやる部屋が出てきたり、あるいは、別荘自体が貴族の別荘ではなくて、農作業場になっていて、これはブドウの液をためて、ブドウ酒を造るための大がめです。1つのかめに500リッターから700リッターぐらい入ります。これは鹿児島大の考古学の女子学生が中を掃除しているところです。

修復も兼ねてやっていきましたので、ヴェスヴィアナという町の将来の観光資源になるんじゃないかということで、大変期待されるものになりつつあります。

これが私の大体の今までの仕事なんですけれども、最近、ユネスコの教育の未来に関する報告書というレポートを作成するための国際委員会に入りまして、仕事を3年間ぐらいしてきて、それを2021年にまとめて、発表されております。このレポートにもし御興味がありましたら、ファイルをお渡ししますので、読んでみてください。大変すばらしいレポートだと自画自賛したいと思っています。

教育というものは、社会の中にある絶対的なものじゃなくて、相対的なものである、だから、ある部分では、時代と共に変わっていかねばいけないということを、このレポートの中で強調しています。真ん中の段ですが、世界を形成する能力と、世界によって形成される能力を備えたダイナミックなシステムでなければいけない。これは特に日本のようなすばらしい、明治以来の教育制度が成功したところでは、どうも教育というものを固定的に考えてしまっています。常に刷新していかななくてはけません。それが最近、余計に重要になってきているんですけれども、十分に対応できなくなっています。このことは、このレポートを書いたときに、世界中でそのとおりだとみんなに納得してもらえたので、大変よかったと思っています。

なぜそうなのかというと、今、誰もが言うように、世界はVUCAの時代とされています。つまり、変動性 (Volatility)、不確実性 (Uncertainty)、複雑性 (Complexity)、曖昧性 (Ambiguity) が世界全体を覆うようになっています。今までのいわゆる第二次世界大戦後の国際連盟のシステムの中で、ある一定の安定があったのが、全くなくなってしまうという状況をよく表している言葉で、そのことを我々は認識しながら、次の世代に生きる人たちが生きるための知恵と技術と気力を渡していかなければいけません。

しかも、今現在、20年後には今存在している仕事の8割がなくなるであろうとよく言われています。しかも、恐ろしいことに、既に先端的な工場は真っ暗で、明かりがないんです。工場を見ても、どこで何をやっているか全然分かりません。なぜならば、ロボットがやっているからです。怖いほどです。そういうところは我々の意識の中には全くない仕事場で、今どんどん増えています。そういうことを認識しなくてはなりません。

それからもう一つは、特に日本の場合なんですけれども、どんどん人口が上がって行って、2008年には1億2808万人までなったんですけれども、それから減りつつあります。

そのことを私の下手な図で描くと、こういうふうになるんじゃないかと思います。戦争が終わったときには人口が7200万人だったんです。それが1967年のちょうど経済発展期のときに1億人を超えて、バブルのときに1億2000万人になります。2008年のときに頂点に達して、ここからずっと下がって行って、2021年には1億2500万人と300万人減っています。このグラフを見れば分かるように、1980年から1990年代のあのバブルのとき、なぜあれだけ経済的に燃え上がったのかというと、明らかに人口が増えたからです。ものづくりの技術がすごかったんだとか、いろいろ言われていますけれども、最も基本的なことは人口増加なんです。そのことが日本の勢いをつけていったんですけれども、今明らかに減りつつあって、この減りつつある減少をストップさせることはしばらくできないと思います。なぜならば、いまだに男女同姓でなくちゃいけないとか——あるいは、スウェーデンやフランスなどでは、婚外子の若年労働人口が結婚から生まれた人たちよりも増えています。ですから、パートナー同士で生まれた子どもと婚姻で生まれた子どもを法律的に全く平等に扱う制度をつくらない限り、絶対に人口は増えません。これはまだ国会で議論されているレベルですから、あと5年、10年かかります。

これは私が苦労して厚労省のエクセルの数字をグラフにしたんですけれども、1994年の1世帯当たりの平均収入は640万円ぐらいです。それが今現在は驚いたことに540万円ぐらいになっています。もっとひどいのは可処分所得で、540万円あったのが、今は400万円そ

こそこで、140万円減っているんです。

なぜこんなことをしたのかというと、今、私は私立大学でも勤めているので、いろいろ調べたら、今から25年前ぐらいの地方の御両親たちの都会の学生への仕送りは平均12万5000円あったんです。ところが、2018年には8万円になって、今は多分8万円を切っています。だから、日本全体があらゆる意味で貧困化しているんです。こういう貧困化している状況をなるべく政治家は隠したい。

もう一方で、貧困化の中で、一部の人が富裕化し、多くの人たちが貧しくなっていて、中産階級が減っているんです。ところが、中産階級という中間地域のところを目がけて、お役所は政策を打ち出します。ですから、中産階級を狙った政策に的を絞ったら、それに該当する人が以前よりもはるかに少なくなってしまうています。つまり、政策が無意味になってきていて、機能が失われつつあります。そういう社会になっています。これは決して日本だけじゃなくて、ヨーロッパなんかも中産階級がどんどん減っています。

日本は、それだけの貧困化で、世界の先進国の中で最貧国になりつつあります。けれども、素晴らしいことは、よく日本のよさはアカセキレイだと言われています。つまり、安全、確実、清潔、規律、礼節があります。この社会的な倫理というか、社会的な価値観というものは、今でもまだ厳然としてあるので、例えば中国で大金持ちになった人たちや韓国で大金持ちになった人たちも、余生は日本で過ごしたいと言っているんです。これはアカセキレイのおかげです。ぜひアカセキレイという言葉覚えておいてください。

それで、以前はこれにプラス、清貧も価値があることだということで、1つの倫理の視点がありましたが、残念ながら、バブル期を過ぎた頃から、日本での清貧という価値観はかなり衰えていきました。しかし、まだアカセキレイがあるということです。

そして、我々が今考えていかなくちゃいけない、ナレッジコモンズという、知識を共有財産として、みんなで活用しようじゃないかという考え方は、我々がユネスコでいろいろ考えたときも、世界中の人間がオーケーを出してくれました。ナレッジコモンズというものは、それにアプローチをしたり、アクセスをすると、そのアクセスの数でさらに大きくなっていくんです。例えばグーグル翻訳とか、グーグル翻訳よりももっといい、DeepLというコンピューターの翻訳があります。これなどは、我々が入って、日本語をコピーして英語に直す回数が増えれば増えるほど、AIで翻訳能力が上がっていくんです。ナレッジコモンズもそうなんです。ですから、より多くの人、より多様な人々が、我々が世界中で共有しているナレッジコモンズにアクセスすればするほど、ナレッジコモンズ自体

も増えていくということです。

ナレッジコモンズというのは、人類が共有する大きな泉、湖のようなもので、無尽蔵の資源があります。これに印刷機、図書館、学校教育システム、インターネットなどでアクセスすれば、さらに大きくなっていくんです。だから、みんなで共有財産を増やすためには、よりアクセスしやすいものにしていかなければいけません。そして、アクセスすることが楽しいものにしていかなければいけません。さっき大字先生がおっしゃっていたような、学校を楽しくするというのも、ナレッジコモンズを大きくすることなんです。単にその1時間、2時間が楽しいんじゃないくて、その先には我々が共有できるものが大きくなるという喜びも意識していただきたいです。

学校教育と学びをちょっとあれしたんですけれども、これは素人が書いただけですから。

今現在、世の中というのは非常に複雑になっていて、例えば地球上に住むみんなが共有しなければいけない平和であるとか人類愛であるとか環境がグローバルコモンズだとすると、一方で、ローカルコモンズがあります。地域のエゴというか、地域を第一に考えるということでは、必ずしもグローバルコモンズとローカルコモンズが一致するわけではないです。それから、勉強でもGIGAスクールみたいにバーチャル学級というものが提唱されていますが、リアル学習、体験学習の貴重さというものは見捨てることができません。いろいろなところで何かを進めるときには、かつてとは違って、反対要素がどんどん出始めています。そのことを我々は十分に意識して、教育、学びというものを考えていかなくちゃいけないのではないかな。

その中で、今、我々の目前に出てきているのがデジタルコモンズです。これは絶対に避けては通れないんですけれども、今まであったように、いろいろな反作用があります。例えば1760年に産業革命で蒸気機関が出てきたので、そのために霧のロンドンになってしまったりとか、あるいは、核実験が行われると、結局は原子力爆弾が出てくるとか、今現在は生命科学で山中さんが細胞を再興させるような技術が出てきましたが、必ず将来、生物としての化け物が出ます。ペニシリンが出てきたために、最初は徹底的に抗生物質が効いたんですけれども、今は抗生物質が効かない細菌やウイルスがたくさん出てきています。つまり、我々がそうじゃない、耐性のあるものを生み出しているんです。ですから、細胞の再生技術なども必ずとんでもない細胞がどこかでは出てきますが、我々はしようがないということで認めていかざるを得ない状況だと思います。

これも自分で作ったので、お恥ずかしいんですが、小学校や中学校や大学、専門学校で

得る知識というのは、構築性のあるものだけでも、実は非常に薄いものです。この薄いものを生活や職業や研究に役立てるためには、どうしても体験学習が必要なんです。だから、小学校のときには、学校で習った掛け算を何かお買物をするときにどう使えるのかとかそういう体験学習によって、初めて知識というものが何か使える知識、あるときには知恵にもなっていくます。それから、中学校、高校の頃には、インターンシップとか部活動で知識と体験をジョイントさせる。大学ときには、今、日本のサイエンスで一番弱い部分なんですけれども、フィールドサイエンスという、現場からデータを取って、結果を考えるということがあります。こういう薄い知識を厚い知識や経験にすることによって、今度は何かを学びたい、もっと知りたいという意欲が出てくる、その意欲の中から新しい知恵とか発見とか発明が出てくるわけです。ですから、我々は絶対に薄い学校教育に期待しなくちゃいけないんですけれども、そこだけでは終わらないです。それをどう体験やインターンシップなどに結びつけるかが非常に重要で、この部分が弱いです。

例えばフランスのエリートが行くENAという行政学院がありますけれども、そこは自分が希望すれば、世界中の企業に6か月、インターンシップで出かけることができます。ですから、日本のトヨタに來たり、小さなモーターを造っている日産に來たり、ああいうところにENAからたくさん来ています。そういうことを教育のシステムの中にも入れて、体験学習、リアル学習を強調していく必要があるということです。

最後に、私は海外の人たちと2年半ぐらい付き合っていて驚いたのは、我が国は——IWI、Inclusive Wealth Indexという、包括的な国の富というレポートが2012年に発表されました。これはケンブリッジ大学の数学で世界でも最も信用が置かれている方、ダスグプタというインド系のイギリスの方がチーフになってまとめたものです。そのデータによると、世界のそれぞれの国の富は、人的な富と社会的なインフラと自然資源の3つから成っている。これで考えると、2008年のデータなんですけれども、1位がアメリカで、2位が日本です。ところが、3億2000万人のアメリカの人口、1億2000万人の日本の人口で割ると、1人当たりで一番豊かなのは日本だったんです。しかも、日本だけが突出して人的資源が厚くて、76か77%ありました。これは全て明治以来の教育のたまものでした。ところが、その5年後、2017年に2010年のデータでやったところ、がたっと日本は落ちていって、ドイツとかが上に上がってきました。これは非常に重要なデータだと思って、僕は日経に書いたんですけれども、誰も注目してくれませんでした。

いかに日本の富、資源というものが教育にあるか、そして、教育こそ日本にとっては最

もサステナブルな産業なんです、そのことを忘れてしまっています。最もサステナブルな産業である、そして、日本ではそれしかないということを我々はもう一度思い出して、その整備をする。そうすることによって、今の若い人たち、子どもたち、次の世代も勇気を持って、自信を持って、次の社会に飛び込んでいくことができるのではないかと、そして、その勇気を我々が少しでも準備してあげることが、私は今77歳ですけれども、幸いにも戦後恵まれた世代に生きてきた我々人間の責務じゃないかと思っております。そして、人口も減るでしょうけれども、先ほど申し上げたアカセキレイという価値観、あるいは、生活の倫理観さえ維持できれば、そこに住んでいる人間は自慢をして、自分たちの生活空間を誇ることができるし、海外からもある一定の尊敬の念を持っていてもらえるのではないかと考えています。

どうも以上です。(拍手)

○司会 青柳理事長、ありがとうございました。

青柳理事長におかれましては、後ほど第2部の意見交換においても御参加いただきます。大変貴重なお話をいただき、誠にありがとうございました。(拍手)

第1部は以上となります。

この後、10分程度の休憩を予定しております。

この教育総合センターでございますが、世田谷区の教育を推進する拠点としまして、様々な役割を持った部屋等がございます。今回、休憩時間の中で、区立若林小学校の児童が作成しました教育総合センターの紹介動画をお流しします。ドローンを使用した子ども目線の紹介動画になりますので、ぜひ御覧いただければと思います。

また、この休憩時間に会場から御質問を集めます。会場の皆様につきましては、質問票に記載いただきまして、入り口付近の会場係員までお持ちください。Zoomの皆様は、Q&A機能により質問をお寄せください。よろしくお願いいたします。

それでは、これより10分間の休憩に入ります。

(休憩)

○司会 それでは、時間になりましたので、再開させていただきます。

先ほどの区立若林小学校の児童が作成した動画はいかがでしたか。結構かわいらしかったですね。私もドローンはやったことがなかったので、小学生の皆様にもいい体験になったのかなと思います。

さて、この休憩時間に多数の御質問をいただきました。皆様、誠にありがとうございました。

す。

それでは、これから第2部の意見交換に移りたいと思います。

ここからは第2部の司会としまして、平沢教育総合センター長に進行を交代いたします。平沢センター長、よろしくお願いいたします。

○平沢教育総合センター長 では、皆さん、よろしくお願いいたします。

昨年の12月8日に開設をいたしました教育総合センターのセンター長の平沢と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私がセンター長になって最初にした仕事は、21日にこのドローンの撮影をしたことです。ただ、子どもが飛ばすためには、いろんな許可、申請をしなくちゃいけないということで、企業の協力をお願いしまして、プロの撮影家が小学校5年生の目の高さで飛ばしていただいた内容になります。それをプログラミングのプロの方と、プロのユーチューバーの方にお手伝いいただいて、ここは元若林小学校だったんですけれども、前の若林小学校を知っている子たち、当時小学5年生に来ていただいて、3時間ぐらいですかね、あっという間にユーチューブに載せられるだけの作品を作っていました。

いろいろな教育財産をここで活用して、それを区内に広げていくということがこのセンターの使命の一つだと考えています。この場所を使って、今日の総合教育会議の意見交換を進めることに物すごく責任を感じておりますけれども、70分間、よろしくお願いいたしますと思います。

ここからは区長と教育委員会による意見交換ということで進めてまいりますけれども、先ほど御講演いただきました青柳理事長にも御出席をいただいておりますので、後ほど御意見いただければと思っています。よろしくお願いいたします。

それでは、これから意見交換に入っていきたいと思いますが、区長と教育委員会による意見交換ということですので、まず、保坂区長から御発言いただこうと思っています。先ほどのお二方の御講演の感想を交えていただきながら、この意見交換に区長としてどんなことを期待されているかというところをお話しいただければと思います。よろしくお願いいたします。

○保坂区長 改めまして世田谷区長、保坂展人です。

まず、大字先生は、10分間と本当に時間が限られてしまって申し訳なかったんですが、小学2年生の女の子が、毎朝、声をかけてくれる校長先生が大好きですという手紙が宝ですというあたりがとてもすてきだったなと思います。

大字先生のお話の中で、マスクが子どもたちの内面に長期にわたって与えている変化、マスクを取った顔を見せられないんだという声は私の元にも届いています。

そして、データがございました。不登校の子どもたちが激増している。全国的に激増をし、当世田谷でも非常に増えています。そして、毎日楽しいとか、夢があるとか、充足感や自己肯定感に関しては、明らかにマイナスに向かって減退しているという傾向が子どもたちに見られると。

最後に、先生方を応援してくださいと言われたところで終わったんですが、実は先生方、教員からの声の中には、全く時間がない、たくさんの雑務に追われて、毎年いろんな新しいプロジェクトができると、古いプロジェクトが廃止されるということにはなかなかならず、いわゆる多忙化するということで、結局、子どもとしっかり時間を気にせずに対話すること、悩みがあれば聞くこととか、そういう時間が削られている、もっと言うと、授業の準備をする暇がないということが聞かれているので、何でもかんでも学校へということで、これは行政も含めて地域からのリクエストが多過ぎる中で、もう1回、学校の教員の仕事の仕方、子どもに向かい合うことを第一としてほしいという現場の声だと思っています。

青柳先生はここにいらっしゃるの、また御発言いただけると思うんですが、冒頭のポンペイから始まった発掘調査の話だけでも二、三時間、私は聞きたいです。ある意味で金になる学問とか、成果が半年でどう出ているんだみたいなことばかりが言われている今の大学や学術分野の中で、多分、考古学などというのは本当に世代を超えて、3代で発掘するというようなお話だと思うので、そういうことをしっかり大事にしてきた社会がつい少し前まであったのに、今、随分、日本の社会というのはゆがんでしまっているなど。これは日本だけじゃなくて、グローバリズムの波の中で、少しでもお金を確保し、効率を上げ、余計なことはやらずにみたいな波が学術分野にばあっと押し寄せたという中で、とても貴重なお話だったと思います。

特にユネスコの教育の未来——世界各地でコロナの中でも様々な意欲的な、これまでの枠を破った教育プログラムが生まれています。行ったり来たりということができませんので、インターネットなどを介してしか情報が共有できない数年間であったわけですがけれども、そういう中で、日本がかなり大きな停滞の壁にぶつかっているんじゃないかと。単に停滞しているんじゃないかと、減退しているというか、衰えて、だんだんポジションが低くなっている。

その中で、青柳先生の図は私も借用したいなと思ったんですが、三重丸があって、真ん中に大学、専門学校があって、中側に中高があって、一番外円部に小学校があると。それだけでもなかなか面白い図なんですけど、やっぱり発掘調査ですね、ちゃんと下のほうには奥深い体験、教育長が推進しようとしているキャリア教育にもつながるんだろうと思いますし、リアルな学びというのはすごく大事だと私は思います。もともと人間が学びを獲得してきたというのは、船を造って、荒波を越えていこうというときに、船の設計をどうするか、部材をどうするか、かじをどういうふうに切るかなどは全て学問ですよ。このことを古代から人間は格闘しながらつくり上げてきたので、学びと実装は切っても切れないです。そこを間違えていたら、船は沈んでしまうということだったんですが、工業化社会の中で、いわゆる知というものがあつた種の人間選別のためのツールになってしまって、学ぶということは大学受験を突破するためで、終わったら忘れていいみたいにゆがんでしまったこの間だったかと思います。

世界中で体験学習、キャリア教育が非常に目立ってきている中で、これもほんの少し前まで、10年ちょっと前まで、日本の教育資産、人材をつくり上げている質は世界トップクラスだった。これが「だった」という過去形なわけで、ここ10年で明らかに落ち始めているよという問題提起をいただいたと思います。つまり、このままやっていると、どんどんずるずる低下していくのではないかと。毎日、真面目に親も子どもたち自身も教員も学校管理職もみんなが直面する問題に取り組んでいるんだけど、いま一つ、大きな視点で学びというものを——青柳先生が上に円錐形で描いたところが一番ポイントだと思います。発見だとか気づきだとか認識の飛躍がウェルビーイングにつながるのかなど。本当にどきどきわくわくして、とにかく意欲が全身からみなぎってくるような体験を子どもたちはできるんです。できるんだけど、いろんなものが豊富だけれども、させてあげられないということを一日も早く変えていく発信拠点として、平沢センター長が毎日いらっしゃる教育総合センターがあると思っています。建物があるだけでは始まらないんですけど、中身をこの会議で深められたらと思います。

ちょっと長くなりましたが、そんな感想を持ちました。

○平沢教育総合センター長 ありがとうございます。冒頭の区長の御挨拶の中にもありましたけれども、ここで大きな教育の方向性という意見交換になればいいかなと思っていますので、よろしく願いいたします。

今の区長の御発言に質問のある委員さんはいらっしゃいますか。大丈夫でしょうか。

では、進めてまいりたいと思います。限られた時間ですので、たくさん、いろんな機会でお話ししていただきたいので、長くても3分程度で1回の御発言をおまとめいただければと思います。よろしくお願いします。

教育の方向性というところで、今日のテーマは「コロナ後を見据えた学びの変化について」です。学びを変化させるということは、その目的として一体何があるんだろうというところをまず各委員さんから御発言いただいて、方向性がぶれているのかとか、共通項があるのかとか、そういうところから話を進めていきたいと思っています。学びの変化というところで、各教育委員さんがコロナ後の子どもたちにどんな力を身につけてほしいのか、在り方、生き方として何を目指してほしいのかという内容で御発言いただけると大変ありがたいと思います。お二人の御講演も踏まえていただければ、なおさらありがたいです。

それでは、私のほうから順番に、簡単に経歴などを御紹介しながら指名させていただきますので、1巡目はそんな形で進めさせていただきます。

まず、今日、オンラインでの参加になってございますが、鈴木委員に御発言をお願いしたいと思います。鈴木委員は元小学校PTA連合会長を務めておられました。保護者の視点からという御発言になるかもしれませんが、もちろんそれ以外の立場からの御発言でも結構でございます。それでは、鈴木委員から口火を切っていただければと思います。よろしくお願いします。

○鈴木委員 よろしくお願ひいたします。

まずは、大字先生、青柳先生、貴重なお話をありがとうございました。学校現場の様子を数値で説明していただきましたので、非常に分かりやすく、またインパクトがあり、保護者としては少しショッキングな内容だったと思います。特にマスク指導については、保護者の教育も不可欠なのかなと考えながら聞いておりました。また、私たち保護者は、改めて先生の応援団にならなくてはと思った次第です。

次に、青柳先生の話のを伺って印象に残った言葉は、アカセキレイと、教育は産業であるという2つの言葉です。この言葉は私にとっても、この先ずっと大切にしていきたい言葉となりました。教育というのは時代とともに変化をしていかななくてはいけないという内容についても非常に印象に残ってしまして、変化を怖がる私たちにとってはとても勇気のあるメッセージだったと思います。これから変化に対して、私たちは柔軟に対応していけたらというのが感想です。

私は保護者ですので、これからは保護者の立場から、コロナを通して感じたことを少し

話します。

これまで私たち保護者は、子どもたちの学習のほとんど全てを学校教育に丸投げしてきたと思っています。さらに、共働き家庭の増加で、家庭教育が担うべき事柄まで学校に依存する家庭も増えてきました。しかし、コロナ禍でついに多くの親が我が子の姿に向き合うこととなり、家庭教育において自ら学ぶ姿勢を育ててこなかったことを認めざるを得なくなってきたと思います。同時に、どうすれば自分で勉強できる子に育つのか、親の自分が分かっていないという事実にも直面しました。

コロナによる休校状態だった頃、子どもたちはストレスを抱えていたという意見も多く聞かれますが、一方で、歓迎しているという意見も聞いています。思う存分、好きなことができたので、知り合いのお子さんは、毎日ひたすら魚をさばっていたそうで、学校が始まる頃には立派なおつくりを作れるまでスキルが上がったそうです。また、中学生のお子さんですが、高校受験に向けて、自粛中にしっかり勉強しておけば、ライバルと大きく差をつけられると考えて、自粛をチャンスと捉えるという、察知する能力の高いお子さんもいました。このようなお子さんもいれば、ひたすらゲーム三昧だったというお子さんの話も聞いています。このような話を耳にすると、自宅学習の責任は家庭にあると思いますし、家庭教育力が浮き彫りになったように思います。

また、家庭のIT環境や教育方針、保護者のサポートの有無などが子どもたちの学びを左右し、学力差を拡大させたという話もあります。確かに御家庭でリモートワークをしている姿を子どもが目当たりしたときに、例えば英語を使って仕事をしている様子を見たら、世の中には英語を使わなければならない仕事があるんだと認識して、英語の勉強を試みようかなとやる気スイッチが入る可能性もあります。しかし、そのような御家庭はごく一部だったと思います。その場合は、学校の先生方が親の代わりになって、面白いこと、興味のあることを見つけて、モチベーションを高めながら、やる気を育てていただくことになると思います。学校でもICTを使えば、新しい可能性も出てくるということで、先生方の寄り添いに期待したいなと思ったところです。

これから子どもたちが社会を生き抜いていくためには、学力でははかれない能力のほうが必要になってくると思います。いろいろ言われていますが、特にコミュニケーション力など、各家庭で担うことができるものは何か、保護者一人一人が認識して、考察していかなくてはならない時代になったと思います。

私からは以上です。

○平沢教育総合センター長 ありがとうございます。家庭教育の重要性、子どもが自ら学ぶ力、コミュニケーション力という御発言だと受け止めました。

続いて、中村委員にお願いしたいと思います。中村委員は元世田谷区の中学校の校長先生を務められていました。学校現場に長く携わった御経験をお持ちでございます。それでは、中村委員、よろしく申し上げます。

○中村委員 くしくも私は今の別の仕事の関係で、現在の学習指導要領をつくった方のお話、それから、教育関係を取材されたNHKのアナウンサーの方のお話を、この間、伺うことができました。明治の学制ができてから150年で、明治のときは近代化がキーワードで、第二次世界大戦が終わった後は民主化ということがキーワードになってきました。

今現在は、このコロナ禍ではありますが、ずっと言われている情報化とグローバル化の2つが教育に大きな影響を与えている背景の中で、文科省の学習指導要領担当の方から伺った話としましては、個別最適な学習と協働的な学習を学習指導要領では言っています。分かりやすく言うと、皆さん、美術の授業を思い出していただければと思います。美術の授業は、最初に説明を受けたら、作品完成までほとんど個人の作業ですよ。それがほとんどの教科で行われるようになってくると考えてもいいんじゃないかと。ただし、美術と違うのは、ずっと個人作業ではなくて、話し合いの時間とか、調査の時間とか、いろんな学習方法が取り入れられてきます。つまり、先生が黒板を使って、チョークで板書して説明するという授業ではなくて、美術の授業の中にいろんな要素が加わったような授業が今後つくられていくとイメージしていただければいいです。

何でそんなことが必要なのかというと、同調圧力とか正解主義から脱出するためです。一人一人の理解の構造は違います。私も違います。例えば図で示されると私は駄目で、むしろ文章で書かれていたほうが理解しやすいんです。でも、人によっては、図になっていたほうが分かりやすいという人もいます。一人一人、理解の引き出しが違います。一人一人が違うということを知った上で、一人一人の学びを大切に、それでやる気を生み出す、それから、他者との対話を通じて納得解を生み出す力を目指しています。学びのわくわく感とか、教科の学びが自ら設定した課題を探究する上で生きるという実感、自分の学びを自分で調整する主体性を目指していくことが今後必要だと言われていています。ただし、その邪魔になるのが一斉授業であり、その一斉授業でやったことをペーパーテストで測定する、それが終わって、入学試験が行われて、そこから先も将来まで影響するという現在のシステムが最大のハードルです。

それから、学校の縦割りという、学年なども場合によっては取り外す必要があるかもしれません。それから、入試にも関係しますけれども、学びや進路の選択を制約する様々なバイアス。もっと極端な例を数字で挙げていましたが、理科系を目指す女性の数が非常に少ないというのも例として文科省の方は挙げられていました。そのような様々なバイアスが日本の中には存在しています。私が世田谷の校長をやっているときに一番実感したのは、学力、イコール、テストの点数という、皆さんの根強い考え方があって、それをこれから変えていかなければいけないのかなど。そのためには、先ほどからウェルビーイングとかと出ていますけれども、誰もがビル・ゲイツになれるわけではありません。普通の子どもの幸せとはどういうものなのかということをお我々大人が提示していかなければいけないのではかと最近考えております。

以上でございます。

○平沢教育総合センター長 ありがとうございます。最近の学力、主体性というキーワードをいただいたかなと思っています。

次に、亀田委員にお願いしたいと思います。亀田委員は元文部科学省に御勤務の経験、それから、特別支援教育にも長く携わっておられます。それでは、亀田委員、お願いします。

○亀田委員 ありがとうございます。教育委員の亀田徹です。大字校長先生、青柳理事長のお二人の先生の話はとても刺激的だったと思います。大字先生からは、子どもたちのため、学校の先生方自身が元気であることが大事だというお話がありました。また、青柳先生からは、ユネスコの報告書ということで、教育は変化する世界の中で、固定化してはならないというお話がありました。

お二人の先生方のお話を合わせまして、私からは、私たち自身が変わっていく必要があるということをお申し上げたいと思います。

これからの時代、コロナの前後にかかわらず、変えていく、変え続けるということが求められていると考えます。というのは、今の日本では、人々の考え方や生活はどんどん変化しているわけですが、それに合わせて、社会や経済の仕組み、制度が追いついていないという大きな問題があります。それが今の日本の様々な問題の根底にあると考えます。変えていける、人と違う、新しいことに価値がある、少数であったり、特別であること自体がかっこいいという社会、世田谷の教育を目指したいと考えます。

では、それをどうするか。以前から学校教育では、自ら課題を見つけ、解決する力と言

われています。それを具体化するために、お子さんたちに何を教えるかということも大事なんですが、それ以上に学校という場を変えていける場になっている、学校がそうなるために、教育委員会自体を変えていける場になっている必要があるのではないかと考えます。

「隗より始めよ」という言葉があります。お子さんに求める力は、まず、教員が発揮する必要があって、教員に求める力は、まず、教育委員会が発揮する必要があるのではないかと考えます。これからの人材に求めるものは、人によって考えるところは様々だと思いますが、私としては、どのような力をお子さんたちに求めるにせよ、まず、自分たちからそうしようという点を強調したいと思います。その上で、私は社会を変えていくということが求められていると考えます。変えていくためには、反対する人たちを説得するエネルギーが必要ですし、正解が分からないまま変えていく勇気も必要です。そうした課題を乗り越えて、変えていける社会、日本であり、世田谷の教育であることを目指したい。そのためには、まずは教育委員会がこれまでのやり方や仕組みを変えていくことを重視する必要があるのではないかと私自身のことも含めて考えています。

以上です。ありがとうございました。

○平沢教育総合センター長 ありがとうございました。まず、教育委員会から変わっていくというお話、自ら課題を見つけ、解決する力という御発言もいただきました。説得するエネルギー、勇気という言葉もありました。

それでは次に、オンラインで御参加の澁澤委員にお願いしたいと思います。澁澤委員は環境NPO法人の理事を務められており、地域、大学、企業と様々な関わりを持たれていらっしゃるお立場におられます。それでは、澁澤委員、お願いいたします。

○澁澤委員 御紹介いただきました澁澤です。今御紹介いただいたように、私は環境NPOという立場、それから、大学で講義をしております。

最初の大字先生のお話は、今の大学生にそのまま当てはまる状況だということです。この2年間、完全に授業はオンラインが中心になってまいりました。今年になって、少し対面が出てきましたけれども、私の授業は3年目に入ってもオンラインのままです。

そうしますと、どういう変化が出てきたかということ、学生たちは、ある部分は物すごく理解力が増しました。対面だったら、さっと流してしまったものを、オンラインであるがゆえに何回も聞き直したりとか、自分のペースで授業を聞くことができるということで、ある部分は大変理解力が増したと言えます。

同時に、彼らは大変な不安の中で暮らすことになっています。周りの学生たちは一体ど

ういう状況なのか、あるいは、自分が理解したと知っていることが本当に理解できたのかという不安、それから、もっと言ってしまえば、ICTの中、つまり、デジタルな世界の中に自分自身を見つけていこうとしている子どもたくさん出始めました。小学校の現場、中学校の現場でもGIGAスクールが進んで、タブレットが各自に配付されました。タブレットの使い方を見ても、ユーチューブを御覧になるお子さんたちが大変多いということも存じております。

ユーチューブによっていろいろな刺激を得たり、知識を得たりということはあるんですが、今の大学生に危惧していることは、ネット社会の中で、例えばゲームを中心としたサークルに自分の自己肯定感を見つけようとしている学生がとて多くなりました。自己肯定感を現実社会ではなく、架空の空間の中に求めていく。今、私たちのこの便利な社会というのは、その両方をやろうと思えばできます。どちらがいい、どちらが悪いということではなく、そのような社会に今私たちは生きているんだということだと思います。ただ、私たちは、人間が身体性を持っている、体を持っている、肉体を持っていることを忘れることはできないし、自分の思考の世界と、自分の肉体で感じるということの両方のバランスの中で、先ほどのウェルビーイングではありませんけれども、人間は幸せ観をつくっていくんだと思っています。

私は今年69歳なんですが、まさに高度経済成長の中で生きてきました。物を豊かにして、経済的に豊かになることがウェルビーイングだと信じてきました。ただ、そうではないということははっきりしています。そしてまた、過度な経済発展が今日の気候変動ですとか生物多様性の減少という、地球が相当ぎりぎりのところまで追い詰められた状態をつくってきたということも事実です。

世界的な環境問題の会議にも何回か出てまいりました。だけれども、そこに出てくる各国の代表というのは、基本的には、北の国のお金持ちの人たちと、南の国のお金持ち、つまり、その会議まで出てくる航空運賃を払える人たちによって地球の未来が決められてきます。グretaさんが出てきて、今までの決め方では駄目だという演説をしました。だけれども、彼女はとてもヒステリックだといって、人々はどちらかというとな否定的に捉えています。ただ、考えようによっては、一番環境問題の被害を受けるのは、今の小学生、中学生だということも言えるわけです。

今までの私たちが使ってきた民主主義ですとか合理性ですとか経済性、先ほど区長がお話しになったような基軸だけでは、次の時代にウェル・ビー（be）イングな社会は実現で

きない。つまり、私たちの時代はウェル・ドゥー（do）イングだけをやってきました。どうやったら社会の中で生きていけるか、どうやったらステータスを取れるか、どうやったらスキルを持てるか、それが教育でした。その時代から、どうやったら幸せになれるかという時代に大きく変化していきます。そうしないと、インクルーシブ教育も実現しないし、地球環境問題も解決しないんだと私は思っています。青柳先生がおっしゃったような、根本的な教育の基軸の部分の私たちの考え方をもう1回見直す時期にちょうど来ているんだろうと思っています。その意味では、先ほど身体性という話が出ましたが、人と人との関係性ですとか、人と自然の関係性、あるいは、その次の世代に対する関係性という、つながりという言葉の中にウェルビーイングのヒントがあるのではないかと考えています。

御承知のとおり、日本は世界でも下から数えたほうが早いような幸福度です。ということは、今まで私たちの世代がつくってきた幸福ではない幸福を人々は今模索している、そして、新しい形の幸福の恩恵を享受するのが、今の小学生、中学生の世代だと私は思っています。ですから、その意味では、私自身は教育にとっても夢を持っていますし、新しい価値観をコロナ後につくっていければいいのかなという感じがしております。

以上です。

○平沢教育総合センター長 ありがとうございます。ウェルドゥーイングからウェルビーイングという御発言、新しい価値観をコロナ後につくっていくというお話をいただいたと思っています。

それでは、1巡目の最後になりますけれども、渡部教育長に御発言いただきたいと思えます。教育長からは、各委員さんの御発言と前半のお二方の講演を踏まえて、次の世代の子どもたちの成長に向けて、教育長としてどのように教育を進めていきたいかについてもお話しただけであればと思います。教育長の御発言を受けて、次の意見交換を進めていきたいと思えますので、教育長、先ほど3分と申し上げましたけれども、5分程度お話しただければと思います。よろしくお願ひします。

○渡部教育長 世田谷区教育委員会教育長、渡部でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

先ほど大字先生、青柳先生のお話を伺いまして、大字先生は世田谷区内の校長先生で、共にコロナ禍を乗り越えてきた仲間ですから、子どもたちがこのように変化してきたことを伺い、これからまた子どもたちのために必要なことを一緒に考えていきたいと思ひました。青柳先生のお話には、私は非常に強い危機感を持ってお伺ひしました。また青柳先生

が描いた図は、先ほど区長がお話をしていて、まさに世田谷で今後実施していきたい教育の方針だと思いました。

プレゼンをつくってきていますので、ここから少し具体的に世田谷の教育をこのように変えていきたいというお話をさせていただきます。

それでは、画面を御覧ください。コロナ後を見据えた学びの変化ということで、世田谷区の教育施策についてお話をさせていただきます。

先ほど大字先生のお話の中にありましたが、制限された行動の中で、コミュニケーションを取る機会が減少したことが子どもたちを一番変えた部分だと私も感じました。子どもたちは、教員や先生との関係の中から、様々な体験を通して行動の仕方を学んだり、自信をもらったりします。それが全くなくなってしまったので、将来への夢や希望が持たなくなってしまった、これから、どういう生き方をしていけばいいのかというところも分からなくなってしまったことから、不登校の子どもたちも増え、体力も低下してきました。目標がないということが子どもにこのような変化を与えるということが分かります。

コロナ禍の変化と共に、社会は大きな変化をしています。急速な情報化や技術革新などの変化によって、教育も新たな事態に直面しているとも考えられます。有名なキャシー・デビッドソンさんの、子どもたちの65%は今存在していない職業に就く可能性が高い。これは、どこかでお聞きになった言葉かと思います。アラン・ケイさんの、未来を予測する最善の方法は、それを発明することだ。コロナへの対応がまさにこのとおりで、先生方は前例もマニュアルもなく、様々なところで判断を迫られることだったと思います。校長先生たちは、コロナ禍で大きな決断をしていただく部分が多かったと思います。前例がないことは生み出していくしかない、これは私たちも体験として学んでいるところです。

今後、どのような力が必要になるのかということですが、先ほど濫澤先生の話にもありましたが、子どもたちは、今存在しているこの社会の中で大人になるわけではないということを私たちは常に念頭に置かなければいけないと思っています。変化を怖がるということは教育の中にもありまして、20年後、30年後も今のこの世の中で子どもたちは生活をしていくような気がしてしまいます。子どもたちが経済活動を行っていく20年、30年先は、今と全く同じはずがないわけです。ということは、どういう力を身につけさせていけばいいのかが重要になり、そこには新しい価値観を生み出していく力が子どもたちに必要になる力だと思います。自分で判断する力も重要です。自己肯定感が先ほど委員の皆さんの話の中にもありましたが、自分にはできるとか頑張れると思う力がないと前に進めません。

実行力も必要だと考えています。

世田谷区の教育施策として、キャリア・未来デザイン教育を推進しています。「急激に変化する社会の中で、子ども一人一人が社会の担い手として自らが課題に向き合い判断して行動し、それぞれが思い描く未来を実現できる人材を育成する」。これは子どもたちの生き方に関すること、キャリア教育です。どんなことをしながら生きていきたいのか、どんな職業を選びたいのか。それは子どもの自由ですから、「どんな自分になりたいのか」をまず思い描くことが必要です。ただし、これはとても難しいです。「なりたい自分」を考える教育を世田谷区ではしています。

これが全体図の上のほうです。ここに先ほど読ませていただいたキャリア・未来デザイン教育の目標が書いてあります。

キャリア・未来デザイン教育は2本立てになっています。1本目が「キャリア教育」の推進、2本目が「せたがや探究的な学び」の推進です。

キャリア・未来デザイン教育の目的の1つ目ですが、学校を含めた地域社会の中で、自分の可能性を信じて進む力を養うことが重要です。そこでは、地域や大学や企業と連携した教育の実践をイメージしています。実際に子どもたちがクラウドファンディングのシステムを使って、起業の仕方を学びながら、自分が計画したものを達成させる仕組みを学ぶなどという学習です。

それから2つ目は、解き方が定まった問題を解く力——今まで知識と言われていた部分です——ではなくて、自ら課題を見つけて協働しながら解決を目指す力です。先ほどの話の中にもありましたが、社会の中では、さまざまな課題が起こっています。受け身ではなくて、主体的に向き合って、友達と協働しながら解決を目指していく力が必要です。これをせたがや探究的な学びとして、今、授業を全てこのタイプに変えています。

3つ目は、自分の意見が社会を変える力があると実感させる。この力を小中学生のときからつけていくことが重要です。そのためには、自分が言ったから、この学校が変わった、このクラスが変わった、地域が変わったという、自分の提案が起きたという体験をさせることが必要です。

世界の広さとその入り口がすぐそばにあることを知らせる。例えばSDGsを知って、世界を知ったとします。世界は遠いから、自分にできることはないのかというと、絶対にそうではなくて、フードロスも一人一人の積み重ねでできていることを知らせるということです。子どもたちは1人1台のタブレットを持っていますから、ICTを活用して、世

界のビジネスパーソンとつながるということなどがいいかと思っています。世界で活躍する人とつながって、世界を知って、大きな歩みは小さな一歩から成り立っているということを体験してほしいと思っています。

少し長くなってしまいました。世田谷区の施策についてお話をさせていただきました。

以上です。

○平沢教育総合センター長 ありがとうございます。

それでは、御講演の後、この場に御参加いただいている青柳理事長さんから、これまでの各教育委員さんのお話などを聞いていただいた御意見、感想等があればお願いできればと思います。

○青柳理事長 1つは、教育と学びを考えるときに、我々は例えばサッカーチームとか野球チームを考えるように、球団やサッカーチームを経営する側と、その中で選手として働く、活躍する先生方、監督とを別々に考えなくてははいけません。

今、チームを強くするには——経営者のほうが整備された練習場や整備された球場、スタジアムをきちっと造る、それから、移籍料を払って、いい先生を連れてくるようなことをやれば、周りの経営主体がしっかりしていれば、その中での先生たちの活躍、選手の活躍も生きてくる。しかも、経営者たちがファンをたくさん集めて、いいプレーをやったら、みんなでわあっと応援してあげる。それが今なくなっちゃっているんです。

特に今、教育というのは非常に問題視されていて、以前のように勝ち馬に乗っているときは、日本の小中教育は世界一であるなどと文科省が——本当にそうだったとその当時は思いましたが、みんな勝ち馬に乗るということで、応援団がいたわけです。つまり、試合を見ているファンがしょっちゅう拍手をしていました。だから、その中で、先生たちも力以上に活躍できました。だけれども、今は周りのファンも少なくなって、拍手も少ないので、なかなかファインプレーが、あるいは、いい活躍ができないような状況になっています。

我々は今、日本の教育全体をどうするのか、どういう社会をつくりたいのか、どういう社会を引き継ぎたいのかということをみんなでもっともっと真剣に考える。子どもたちのため、あるいは、孫たちのためにそれをしっかり進めることが非常に重要じゃないかなと思います。

それともう一つは、長野の信濃木崎夏期大学という、大正時代から続いているサマースクールがあるんですけども、それを信濃教育会という先生方がやっぴらっしやいます。

信濃教育会は、文科省にとっては目の上のたんこぶみたいなもので、県レベルで人事まで握ってやっているんです。ですから、松本で働いている人を伊那のほうにまで飛ばすことを先生たちのグループが人事権を持ってやっているんです。それはちょっと行き過ぎだと思うんですけれども、夏期大学のために、夕飯、お酒を飲みながら話をしていたら、女性の先生方がいらっしゃる前でも男の先生が、私たち教師は男子一生の仕事だと思っていますとって、女性の先生たちもいい意味で男子一生ではなくて、人間一生の仕事としてやっているという捉え方でありまして、あの意気込みはさすが教育県長野という感じがしました。

ですから、周りで社会経営を担う人間たちが教育をどう組み立てるのか、どう期待するのか、その中で、先生方はプレーしていただくという環境をまずつくるのが一番大切なんじゃないかなと思いました。そして、その中で、意気込みを持っていただければいいなと。

以上です。

○平沢教育総合センター長 ありがとうございます。

これで1巡が終わったところなんですけれども、残り時間が十五、六分になってしまって、私は実は今日、誕生日なんですけれども、人生でこんなプレッシャーを受けた誕生日は初めてで、何とかしたいなと思っています。

区長、ここまでで何か委員さんに対して質問とかがあれば、1回、ここで御発言いただければと思います。

○保坂区長 青柳先生に質問なんですけど、最後のほうで駆け足になられたと思うんですが、上にグローバルコモンズがあって、下にローカルコモンズがあって、左にリアルがあって、右にバーチャルがある矢印ですが、上の斜めに大きなイズム、主義があって、下の斜めに小さな主張や考え（市民主義、生活改善）と書いてありましたが、ここに何かヒントがありそうな気がしたんですが、そこまでお話が及んでいなかったもので……。

○青柳理事長 恐らく冷戦が終わったときに、世界中の人が資本主義とか社会主義という大きなイズムは人類を幸せにするものではないということをみんな認識したと思うんです。そのときから、小さな思想、地域に密着した考え方、行動様式のほうが大事だということは、冷戦が終わったときから経験的に世界中の人がみんな知るようになりました。そうでありながら、今でもなお強権的な国家であるとか新しい民主主義が必要だと盛んに言われています。その一方で、地域に根差した考え方がまだ十分に論議されていません。だ

から、それを早く自分たちの住みかで、わがままを言って構わないから、その地域にとっての考え方をみんなで組み立てることが、コミュニティーをつくり上げる時の一番大切なことではないか。

例えばこの世田谷も、世田谷の外に住んでいる人たちは、いつか世田谷に住みたいという言葉があります。だけれども、一方で、世田谷に住んでいる人は、いつか港区に住みたいということがあるのかもしれない。

今よく言われていますが、マンションが1つ建つと、町会が1つ減るというように、ある意味での富裕化をしていったんですけれども、どんどんコミュニティーから阻害されていくというか、自らを阻害していってしまう。しかも、本当の金持ちになると、盗まれないように、あるいは、安全のために、本当に世間と自分自身を遮断するほどになっていきます。こういう流れが果たしていいのかどうかということです。日本では、3代続くとゼロになると言われるぐらい税制上は厳しいけれども、それでも株の所得なんていうのは20%止まりで、金持ち優遇というのはまだ厳然と存在しています。そういうところを見ると、北欧の税制とかをもっときちっと取り入れなくちゃいけないんじゃないかなと。それがさっき申し上げた斜めのところであります。

それからもう一つ、ウェルビーイングでも、アメリカで言っているウェルビーイングは幸せというものを非常に重要視していますけれども、いつも幸せである、興奮状態だったら、疲れちゃうと僕は思うんです。むしろぼけっとしている、安定した、何でもない、穏やかな日がただただ流れていくほうが心理的には安定しているんじゃないかと思うんです。そういう消極的なウェルビーイングが——2月に沖縄に行ったら、グスクの前のお土産屋さんが、ヤマトンチューはかわいそうね、こんなときに寒いところで、こっちは2月なのに、これほど暖かいんだから、あなたたちもこっちに住みなさいよと言われたんです。本当に住みたいと思いました。あれが本当のウェルビーイングではないか。

事実、今、沖縄は失業率が非常に高いんですけれども、人口は減少していません。それから、若者が結構回帰しています。それは消極的ウェルビーイングで、積極的ウェルビーイングではない。その辺を我々はちゃんと考えていかななくちゃいけないなという意味で斜めに描いておきました。

以上です。

○平沢教育総合センター長 ありがとうございます。

それでは、時間も限られていますが、各委員さんからさらにもう一言ずつ順番に御発言

いただきたいと思います。先ほどの順で大変申し訳ないんですけども、鈴木委員からよろしいでしょうか。先ほどの御発言に加えてとか、学びの変化というところで御意見をいただければと思いますけれども、いかがでしょうか。

○鈴木委員 先ほど教育長から御説明もありましたけれども、ちょうどこの時期が、私たち保護者も学校教育への過度な依存を脱して、家庭教育と学校教育と地域教育の3つの軸による教育へと歩みを進めるチャンスなのかなと思いながら聞いておりました。家庭教育を支援して、コロナで分断してしまった地域教育を整備することによって、子どもたち一人一人の自立心と自主性を育む環境づくりへと踏み出せる絶好の機会が今なのではないか感じております。コロナ禍で子どもたちの自主性と自立性を引き出す教育の必要性が浮き彫りになりましたので、新たな学びの可能性が今開かれたのかなと考えております。以上です。

○平沢教育総合センター長 ありがとうございます。

では続けて、中村委員、お願いします。

○中村委員 先行き不透明とか、今ある職業が将来ないとかという不安定要素が多くて、その結果、やっぱり偏差値の高い学校に入りましょうというような風潮が依然として続いています。何のために勉強するのかといたら、まずは既成概念を打ち破って、社会を変革するため、そして、自分の幸せとほかの人の幸せをつくるために勉強の意味があるのではと考えています。そういうことを伝えられる学校教育でありたいなと思っております。

以上です。

○平沢教育総合センター長 ありがとうございます。

では続けて、亀田委員、お願いします。

○亀田委員 私が今いる会社は、できてからまだ10数年の会社です。これから小学校、中学校のお子さんたちが社会に出ていくときに、どういう社会になっているんだろうと考えたときに、3つキーワードがあると思っていまして、1つは人材の流動化です。今の20代、30代の方は転職するのが当たり前なので、今、自分たちはこの仕事をするためにこの会社において、違う会社に行ったり、独立したりしていくという働き方がこれからの社会で多くなっていくのではないかという点。

また、働き方も自分で選んでいく。オンラインですとか、育休、産休ということで、働き方が多様になっていって、仕事も選択するし、働き方も自分で選択する、選択というのがこれからの社会のキーワードになるかなと。

最後にもう一つは仕事の進め方で、新しいことを始めるときに、準備が完全でなくても、まずは踏み出して行って、P D C Aサイクルを回しながら、あっという間によいものをつくっていく。そのために多くの人の意見を聞いて、スピーディーに改善していく。先ほど教育長からのお話にあった、学校の臨時休業で先生たちも1人1台タブレットで新しいことをやっていく、学校の中でもP D C Aサイクルを回していくというのが最近あったかと思います。今後は、そうした外的要因に迫られてするというよりも、むしろ先生たちや教育委員会が主体的に新しい仕事をつくって進めていくことがこれから求められていくんじゃないかなと思います。

以上です。ありがとうございます。

○平沢教育総合センター長 ありがとうございます。

それでは、澁澤委員、お願いできればと思います。

○澁澤委員 ちょっと教育から話がずれるのかもしれませんが、私は94歳になる母がおりまして、認知症が大分進行しております。世田谷区は福祉行政が大変整っておりますので、いろいろな形での行政からの支援をもらっています。ところが、母は其中でだんだん表情が暗くなってきました。あるとき、母は施設に入って、施設の新聞紙を畳むという仕事を彼女は見つけました。ただ古新聞を畳んでいるだけですけれども、それによって彼女はとても生き生きとして、ある意味では生きがいを見つけてきた、つまり、自分の役目を見つけました。福祉というのは、ただ自分が完璧な福祉を受けられるということが重要なのではなくて、自分がどう社会に関われるかという見返りがないと福祉が完成しないんだということを、私は母を見て、とてもよく教えられた気がしております。その意味で教育というのも、ただ一方的に知識を与えられれば、それで幸せになれるというものでは決してないです。まさにその部分は、これからタブレット、あるいはI C Tの中で、どんどん凝縮して、よりよい学びを得るようになってくる。

もう一方、学校教育の現場では、先ほど大字先生がおっしゃっていましたが、学校行事が重要です。学校行事はある意味では祭りのようなものです。社会教育にも非常に近いんですが、身体性の部分、非認知的能力の部分と共有する、自分の幸せだとか可能性、自分の役目を見つけていくことによって、それぞれの子たちが生きていく。

教育長からお話があったキャリア教育というのは、決して職業教育ではないのです。キャリア教育というと、一般的に社会では職場訓練のように言われますが、そうではなくて、まさに自分の人生をどう自分でつくっていくか、ピーをどう積み上げていけるか。それを

逆に教育側、つまり、教師側も一人一人に寄り添って見ながら、その進歩の過程をずっとチェックできて、アドバイスを与えられるキャリア教育を世田谷は新しい形で作っていただければいいのかなと思っています。

○平沢教育総合センター長 ありがとうございます。

では、そろそろ時間も迫ってまいりましたので、教育長にまとめたところで御発言いただければと思うんですけども、これまでの意見交換を通して、教育長としての御意見を伺えればと思います。お願いします。

○渡部教育長 先ほど亀田委員から教育委員会から変わっていくべきだという話をいただいて、それがずっと胸に残っています。

先ほど中村委員が、文章と図だったら、文章のほうが理解しやすいという話をいただいて、私は膨大な資料を読むときに、文章がばかりだと、分かりにくい、図に表して持ってきてくださいと言うんですが、私は少し自分の考えを変えていかなければいけないと思っています。

2点お話をさせていただきます。

まず1点目は、先生方には夢を語ってほしいということです。大字先生が、教員が元気でなければと言っていました、私はまさにそのとおりだと思っています。先生方は子どもたちとやりたいことをたくさん持っています。ただ、時間的なこと、校務分掌、様々な対応があったりで、それができずにいます。子どもたちに夢を持ってほしいと私たちが願っているのに、その教員が夢を語れないのでは、子どもが自由に夢を語るはずがないと思います。それを支えていけるのは、やはり教育委員会だと思います。先ほど、しっかりと枠をつくって、その中でやっていくという話を青柳先生からいただいたので、私は教育委員会の中で、しっかりとした枠や考え方や方向性を示していく必要があると思っています。

先ほどお話をさせていただいたのですが、フードロスとか海の問題とか貧困とかそういうことを子どもたちが、学びたいと思うんです。そういうときに、先生方は真面目ですから、学校の中で何とかそれに応えてあげようとするんです。この話の流れから、もうお分かりかと思いますが、それは私たちではなくて、企業や大学や地域の方にお任せをする部分だと思います。課題は学校の外で起こっているわけですから、学校の外で学んだほうが説得力があり、子どもが理解できると思います。ぜひ、世田谷の教育を変えていきたいということが1点目です。

2点目は、支援から連携へという話です。学校への支援は本当にたくさんいただいています。でも、私は一方通行ではなくて、連携というところでまで持っていかなければと思っています。企業や大学の方が、新製品のヒントになったとか、今の子どものニーズがよく分かった、この活動をやってよかったよとよくおっしゃいます。ということは、ウィン・ウィンの関係になり得るといことなんです。ぜひ世田谷の教育はこういう方向で変えていきたいと思っていますので、皆さんの御支援をお願いしたいと思います。

以上です。

○平沢教育総合センター長 ありがとうございます。

このことはどうしてもこの場でという方はいらっしゃいますか。

○保坂区長 様々な懸念すべき学校教育の現状として、例えば不登校のお子さんたちが増えたということが言われます。ただ、これはいろんな見方をしなければいけないと思っていて、不登校の子が減れば減るほどよくなったと考えていいんだろうかと逆に思います。明治以来、しかも、つい10数年前までは成功モデルとして語られてきた日本の学校教育——黒板があって、先生がいて、起立、礼、着席で百何十年やってきた成功モデルを変えるのはなかなか大変なんです。一方で、教育機会確保法という法律ができて、学校に行けなくなった、学校に足を向けられないお子さんにも学習権ということで、例えばフリースクール、世田谷区では、ほっとスクールを新しく開設したり、NPO法人に運営を委託したりということも始めています。そして、教育委員会では、不登校特例校をこの4月から中学生を対象につくりました。

もう一つは、不登校の子どもたちの中に多分いろんなサインがあるんじゃないか。サインというのは、子どもたち自身の課題であるとともに、学校教育のシステム全体をこう変えてほしい、このように変化が必要だということを私たちに示してくれている部分があるんじゃないか。そういうことで言うと、もっと多様な、青柳先生がいろいろ力説されたような芸術文化、自己表現、アートにかなりスポットを当てたような、特別な才能を開花させるような学校があってもいい。これは一部そういう先端例をつくりながら、世田谷区5万人の小中学生が学んでいる多くの学校も同時に刺激を受けながら、変わっていくことができるといいなど。

そしてもう一つ、教育総合センターができて、ここに世田谷区の17の大学の学長さん、35の高校の校長先生、かなり大勢が集まりました。実は世田谷区は、教育に携わっている高等教育機関の様々な実践例、また、地域と協働したいという声もあります。そして、そ

ういったことに理解のある企業だとか地域活動団体、NPO等もあります。学校の先生が1点集約的に期待されるんじゃないなくて、地域資産全体が世田谷区の教育資産になるという道をぜひ目指していきたいと思いました。

○平沢教育総合センター長 ありがとうございます。

ほかの方、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、会場、オンラインから御質問をたくさんいただいたんですけども、理事長への御質問がかなりあるんですけども、それ以外もありますので、時間の関係で幾つか御回答いただければと思います。

まず、この質問は理事長にお答えいただければと思うんですが、マスクがもたらす社会について。現在、コロナ禍において、なくてはならないマスクでのマナーですが、大字校長先生の講演のとおり、それにより児童へのよくない影響があるようです。青柳様はマスク社会についてどう思われますかという御質問です。

○青柳理事長 欧米のほうでは、アイデンティティーというか、その人のパーソナリティーを一番殺してしまうものだから、絶対にやるべきではないという、積極的廃止論というものがあります。それは幸いなことに日本はないんですけども、少なくとも今までコロナの発生率が小さかったのは、靴を脱いで上に上るのと、清潔感とかそういうものがあつたのかなと思うんですが、最近の状況を見ると、先週なんかは世界一だというわけで、それも否定しなくちゃいけない。だけれども、今、我々はちょっと過剰防衛ではないかな、例えばあまり混んでいないようなところでは、そろそろマスクを外してもいいんじゃないかということを積極的に試してくれる若者がもっともっと出てほしいなという気がします。そういう意味では、我々は非常にお行儀よく育てられてしまっているんで、どこかでもうちょっと羽目を外したダイバシティが社会の中にあれば、違ういろんな実験ができるんじゃないかという気がします。

○平沢教育総合センター長 ありがとうございます。

次は教育長か区長からお答えいただいたほうがいいのかなと思います。質問を読み上げます。大人の学びについて。スライドで、20年後は今の仕事の8割がなくなるとの衝撃的な表現がありました。また、リカレント教育の御紹介もありました。大人としても、テクノロジーやAIではできない能力を得て、伸ばしていくことが重要になると思いますが、そうした学びの場が世田谷区にもあるでしょうか。

○保坂区長 世田谷区が直接やっている学びの場としては、世田谷市民大学というのがあ

ります。かなり多彩なプログラムがあって、歴史、経済、例えばウクライナとロシアの関係とか、その時々歴史的な考察をするようなプログラムが組まれています。また、生涯大学というのがありまして、60代後半ぐらいから80歳手前ぐらいまでの方が多いいんですけれども、それぞれのコースに分かれながら、一緒に学ぶという形もあります。そのほか、先ほど紹介しましたが、各大学が市民大学とか市民講座的なものをかなりやっていますので、そういう情報をきちんと総合して、こんな学びの入り口があるよということを行政のほうでもしっかり分かりやすく見せていくことが大事なのと、皆さん、ここにいらっしゃる方は分かるんですが、教育総合センターは、講習、シンポジウム、勉強会などをやるような設備が整っていますので、こんなものをやりたいというグループがどんどん出てくれば、支援するような仕組みをつくっていきたいと思います。

○平沢教育総合センター長 ありがとうございます。

それでは、最後になります。これは教育長からお答えいただくことになるのかなと思います。読み上げます。社会の変化に合わせた教育の変化について、理事長の御講演を聞いてということです。ユネスコの報告書で、教育の制度や内容は変化する世界の中で、固定化してはならない、外部の動きが見えなくなると教育は無意味なものになるとの御紹介がありましたが、社会の変化のスピードが年々早まっている中で、教育が変化していくことは、学校にとっても、先生にとっても簡単ではないと思います。どのように対応していけばよいのでしょうか。

○渡部教育長 社会の変化のスピードは早くて、学校の先生とかがついていけないんじゃないかという御質問です。私は長い間、教員をしていましたから、その時の記録があるんですが、私が若いときの記録を読んでも、同じことを言っているところがあります。例えば子どもたちが主体的に学ばなければいけない、子どもたちが協働的に学ぶ（そのときはグループ学習と言っていましたが）、自分の考えだけではなくて、人から得た考えで、自分の考えを深めるというのがあるって、今も同じだと思うんです。教育というのは大事にしなければいけないところもあり、新しくしなければいけないところもあると思います。

先ほどお話ししたように、学校の中だけで学びを終わりにしないという考えを持つことだと思います。このことは、教員の負担だけではないと思うんです。学校は今まで閉ざされた中にいたので、そこはなかなか勇気が要ることです。ただ、一旦開いてみれば、いいということにたくさん気づいてくると思います。この勇気を持てるように教育委員会が変わっていくということだと思います。

以上です。

○平沢教育総合センター長 ありがとうございます。

それでは、まとめの時間に入ってまいりましたので、最後にまとめということで、区長は予算の編成・執行権をお持ちになる立場ですので、世田谷区が目指すべき教育の将来像と今後の具体的な方向性についてお考えをお伺いしますと聞くと台本に書いてありますので、区長、お願いします。

○保坂区長 私自身が20年ほど前に教育問題を専門に扱うジャーナリストで、いじめの現場だとか、不登校のお子さんたちの声などを90年代にかなり集中的に聞いてきたという経験がありますので、そのことも踏まえながら、今日のお話は、総合教育会議としてはかなり中身の濃い、非常に深い部分に触れている議論をおかげさまで続けることができたと思います。

先ほど青柳先生から、サッカーチームの運営に当たる経営側に対してのお話がありましたけれども、少なくとも私としては、教育をどのように変えていくか。変えることが目的ではないんです。そうではなくて、子どもたちがいかに次の時代に生き抜いていける、二度とない子ども時代を知的にも体力的にも人間関係としても豊かに育っていける環境をどうつくれるのかというのが我々の課題だと思っています。そのために学校教育制度があり、教育委員会も含めた様々な制度があるんですが、制度疲労が出てきているのかなとも思います。そういうときに、学校を止めずに変えるということがすごく大事だなと今日思いました。

2年前の3月に学校休校がありました。コロナ対策の試行錯誤で行われたもので、今となって考えれば、なぜあの時期に学校を休んだのだろうということはあるんですが、あれで分かったのは、学校が止まると、地域も大変なことになるんだということだったんです。そういう意味では、学校が継続してしっかり運営をされている一方で、教育改革で今日議論したようなことが内部から、そしてまた、学校に行けない不登校の子たちの新たな意欲を引き出していくような教育現場も学校制度の中にもうまく作りながら、化学反応を起こしていくような環境設定がとても大事だと思います。

そのためには、やはり保護者の皆さん、また、自分のお子さんがある、いないにかかわらず、世田谷区にはたくさんの資産があります。森羅万象、あらゆることについての専門家が全部そろいますし、質の高い研究や教育についての担い手となれるような方たちやグループや教育機関、研究機関もたくさんあります。私たちは区之力、限られた教員之力で、

学校だけでと考えずに、思い切りプラットフォームを開いて、この指止まれでいろんな人たちが子どもに関わりながら、大人も子どもも必要な課題について一緒に解決していこうという、価値創造型の教育改革というんですか。何かぶっ壊すとか、大きく廃止して鮮やかに学校を変えちゃおうみたいなのは、言うのはたやすいですが、なかなかできないと思います。継続して学校を止めずにしっかり運営しながら、構図を変えるというのが一番学校教育をよいものにする最短確実な道なんじゃないかなと改めて思いました。

以上です。

○平沢教育総合センター長 ありがとうございます。

ちょうど時間になったぐらいかなと思います。本当はもう少し続けたいという気持ちもあるんですが、これをもちまして、第2部、区長と教育委員会による意見交換を終了したいと思います。司会を政策企画課長に戻したくないけれども、戻します。お願いします。

○司会 ありがとうございます。もっと時間がないのかと思っている方は私をはじめ相当多いかと思いますが、これで第2部は終了させていただきます。

平沢センター長、ありがとうございます。本日が誕生日ということで、記憶に残る誕生日となることを祈っております。

また、本日の講演、意見交換のゲスト出演を務めていただきました青柳理事長は、長時間にわたり本当にありがとうございました。

第2部のファシリテーターを務めていただきました平沢センター長、青柳理事長は、これにて御退室されます。皆様、盛大な拍手でお送りください。（拍手）

さて、当初のプログラムでは、これをもちまして終了とさせていただくところでしたが、冒頭に御案内させていただきましたとおり、議題を追加し、世田谷区教育大綱の改定に関する協議を行わせていただきます。会議を御覧になっている皆様につきましては、当初予定しておりました終了時刻を過ぎておりますが、引き続き御覧いただけると幸いです。

それでは、ここからの進行は区長をお願いいたします。

○保坂区長 それでは、今日、追加になりました教育大綱は、参加、御覧いただいている皆様には初めてお聞きになる方もいらっしゃるかと思います。実はこの総合教育会議自体が、ちょっと長い名前なんですけど、地方教育行政の組織及び運営に関する法律という中で、地方公共団体の長、つまり、私になりますが、教育大綱の策定をする議論をするために総合教育会議を持ちなさい、その会議の協議を経て大綱を定めていくようにということが決められています。これは平成27年5月から世田谷区の教育大綱という形でスタートしまし

た。総合教育会議自体が始まったのが平成27年というタイミングだったんですが、このときに第2次世田谷区教育ビジョンを教育委員会が策定していたこともありまして、その議論をして発表した直後だったこともあり、それでは、この教育ビジョンを大綱にしていこうということで、教育大綱については、第2次世田谷区教育ビジョンを重ね合わせる、教育ビジョン自体を大綱の内容にすると位置づけました。その後、平成30年3月に教育大綱の改定をしましたが、これ自体も世田谷区教育ビジョンの内容の変更とリンクさせながらの内容となっています。

今回、第2次教育ビジョンの10年の期間の最後の2年間に当たってまして、これについて、そこと内容をリンクさせる教育大綱にしていきたいということなんですが、今日、傍聴されている皆さんがいるこの会議の場で最終的に決定をします。これが実は総合教育会議の一番大事な部分でありまして、この大綱の決定によって、世田谷区の教育の方針、方向性が決められていくということです。

ただ、誤解のないように言いますが、法律上も首長、つまり、世田谷区で言えば区長になります。教育の細かいところまで、このカリキュラムはこうするべきだとかそういうことを一々差配することを任されているわけではないんです。あくまでも今日のシンポジウムの内容にあったような教育の大きな方向性について、大綱——大きな綱と書きますが、これについてのかじ取りをしていくという会議になっております。

それでは、今回、どういう大綱にしていきたいかということ事務局の加賀谷政策経営部長から御説明していただきたいと思っております。

○加賀谷政策経営部長 政策経営部長の加賀谷と申します。よろしくお願いたします。

それでは、画面を共有いたしまして、世田谷区教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱の改定案の概要について説明をさせていただきます。

大綱につきましては、教育目標、基本的な考え方、基本方針、施策の柱から構成をされております。それらは第2次教育ビジョンにも掲げられているところでございます。今回の改定案では、この中の施策の柱について変更していくこととしております。

今回の大綱改定での変更点について御説明をいたします。

こちらが大綱改定前の施策の柱でございます。8つの施策の柱で構成しております。この中の番号ⅡからⅣについて、次に説明する改定案で変更するものでございます。

こちらが改定案になりますけれども、赤字部分が前回からの変更点としてございます。

番号2から4につきまして、「『世田谷9年教育』で実現する質の高い教育の推進」の

部分を「乳幼児期から小・中学校における質の高い教育の推進」へと変更してまいります。これまで取り組んでまいりました世田谷9年教育と、乳幼児期の教育・保育とを一体化して、質の高い教育を推進するとともに、子どもたちが学ぶことと、人生や社会とのつながりを実感しながら、自らが課題に向き合い、判断して行動し、それぞれが思い描く未来を実現していけるよう、キャリア・未来デザイン教育を推進していくことから、変更したものでございます。

また、この間の教育環境の変化に対応しました教育デジタル・トランスフォーメーションを推進するため、番号8を新設いたしました。区では、GIGAスクール構想を受けまして、小中学生1人1台のタブレット端末を配備し、学校や児童生徒の状況に合わせて、ICTを活用しました学びの取組を進めてまいりますが、今後も新たなICT基盤を効果的に活用し、探究的な学び、協働的な学び、インクルーシブ教育などを実現するために、教育DXを積極的に進める必要があることから、新たな柱として、これまでの8つと併せて、9つの施策の柱とするものでございます。

第2次教育ビジョンの調整計画が策定されたこともございまして、大綱につきましても、このように変更してはいかがかということで、案としてお示しをさせていただいております。

以上につきまして、今回の大綱改定における主な変更点となります。

私からの説明は以上となります。よろしくお願いいたします。

○保坂区長 今、事務局の政策経営部長から、このような大綱にしたいという本当に概略ですが、説明がございました。

この提案に対して、これから協議に入るわけですが、教育委員の皆さんから御質問、御意見等はございませんでしょうか。

○亀田委員 今回の大綱の改定は、これまでの総合教育会議の議論を踏まえた内容になっていると考えます。先ほど区長からも御説明がありましたが、この大綱が策定される意義は、教育委員会だけで教育を考えるのではなくて、ほかの分野も含めて、世田谷区として一体的に、総合的に教育を考えるということかなと考えています。

先ほどの青柳先生からのお話でも、教育が閉ざされたシステムになってはいけないというお話もありましたし、先ほどの意見交換の中でも、連携の必要性、大学、企業、地域との連携のお話がたくさん出ていたと思います。したがって、今回の改定による大綱の運用、さらに、次の改定に向けても、区長と私たち教育委員会とで密接に意見交換しながら

ら、世田谷区として一体的に教育を充実できるように、これまでもそうでありましたように、今後も引き続き私たちも努力いたしますし、区長にも特段の御配慮をお願いしたいと思います。ありがとうございます。

○保坂区長 ありがとうございます。

そのほかございませんでしょうか。澁澤委員、いかがでしょうか。

○澁澤委員 今、亀田委員から御説明があったとおりです。教育委員会の中でも、私どもは調整計画と位置づけていますが、新しい大綱の大幅見直しに向けてのクッションに当たる期間にどうやって教育を少しでも現実に合ったものに変えていくかという議論をしてまいりました。その結果が今回の皆さんにお示しした大綱という形になろうかと思えます。

先ほどからの議論もそのとおりですが、社会が大きく変わろうとしています。現実には今日は物すごく暑い日で、この地球も大きく変わろうとしています。そんな中で、未来を生きていく子どもたちが一人でも柔軟な考えを持ちながら自己実現をしていく、しかも、自己実現というのは、大きい社会の中での自己実現をしていく方向に持っていきたい。知恵を出し合った計画だと思っておりますので、ぜひこれを大綱という形で御承認いただければありがたいかなと感じております。

○保坂区長 ありがとうございます。

今、澁澤委員のお話の中で、10年間の第2次教育ビジョンという、教育委員会で作成された計画がありますと。これが向こうあと2年で次のものに入れ替わるというか、バージョンアップしていく——クッションの時期というのは、そういう意味ですよね。そのクッションの時期なので、これまでの積み上げに赤字で示した部分を新たに入れて、今回の大綱にしましょう。しかし、澁澤委員がおっしゃったのは、今日の話、シンポジウムの中身などが全部これで反映しているのかどうかということ、まだまだそうはなっていない。ということは、次の教育ビジョンをつくる時期の手前に大方針の大綱の議論を併せて、しっかり積み上げていくということで、これからの教育方針をさらにシャープで、時代に即応し、未来につなぐものにしていきたいということですが、教育長、そういう理解でいいですか。

○渡部教育長 ありがとうございます。今までは、10年間ということで、前の教育ビジョンは合わなくなってきたところも確かにあります。先ほどの議論の中にもありましたが、10年先、20年先を見据えて、教育の在り方を今、考えているところですので、これから大幅な変更を考えているところです。

以上です。

○保坂区長 御覧になっている方、傍聴の方、そういうことで、今日のお話としては、2年間のクッションについて、大綱として定めていこう、次の向こう10年という非常に大きな大方針については、この総合教育会議で公開された議論をしっかりと積み上げていながら決めていこうということで御理解いただきたいと思います。

それでは、参加されている皆様、今回の大綱の策定で決定でよろしいでしょうか。いかがですか。

ありがとうございます。それでは、本日の総合教育会議の場で新たな大綱の改定を決定させていただきました。次については、しっかりとより根本的な大きな改定についての議論を早速始めていきたいと思っています。

それでは、事務局に戻します。ありがとうございました。

○司会 区長、教育委員の皆様、ありがとうございました。

これにて本日予定しておりました全てのことが終わりました。

以上をもちまして令和4年度第1回総合教育会議を終了させていただきます。

なお、本日の総合教育会議は、来週、8月3日より世田谷区の公式YouTubeチャンネルで配信する予定でございます。YouTubeでは、過去の回も配信しておりますので、ぜひ併せて御覧いただければ幸いです。

また、本日、多くの御質問をいただきました。今回の会議の中で紹介し切れなかった御質問につきましては、後日、本日の議事録をYouTubeとは別に公開いたしますが、その際に回答と共に掲載をさせていただきますので、御確認をお願いできればと思います。

改めまして長時間にわたりありがとうございました。これにて終了いたします。

午後4時33分閉会